

●プロフィール

<学歴・職歴>

慶應義塾大学医学部卒業(1981)、内科学教室入局。血液内科専攻。

カリフォルニア大学サンフランシスコ校留学

報知新聞社、NTT東日本首都圏健康管理センタ、IBM など産業医

荒木労働衛生コンサルタント事務所 所長(2006~)

東京医科歯科大学女性研究者支援室特任教授 (2008~2011)

半蔵門病院 糖尿病外来 (1994~)

<著作・翻訳など>

働く女性たちのウェルネスブック 慶應義塾大学出版会

臨床医が知っておきたい女性の診かたのエッセンス 医学書院 編集代表

性差医学入門(翻訳書) じほう

がんの治療と暮らしのサポート実践ガイド 株式会社エス・エム・エス

<個人的な活動>

NPO 法人 性と健康を考える女性専門家の会

NPO 法人 Cancer Ribbons

NPO 法人 性差医療情報ネットワーク

●メッセージ

私が医学部に入学したときは、120人中女性は9人でしたが、それでも多い、といわれました。学生時代には男女差をあまり感じずに過ごしましたが、その後のキャリア形成では、男女差を感じるような出来事は何度もありました。仕事と家庭の維持はまさに綱渡りでした。1992年に子連れで米国に留学したことで、少しずつ自分の置かれている状況を客観的にみることができるようになりました。

帰国後は自らの経験をもとに働く女性の健康支援をしたいと思い、産業医と内科医の両方のキャリアを続けてきています。性と健康を考える女性専門家の会は、ピルの認可をめぐって設立された会ですが、そこで対馬先生と出会い、いろいろなことをご一緒させていただきました。女性の健康データを集め、統合的な健康支援をすべく、2005年女性ドック構想にも関わりましたが、開院直前に夢の実現が断たれました。その際の戦いが、今までの生涯でもっとも苛酷なものでしたが、多くの方の支援で勝利を得ることができました。諦めずに大きな相手であっても不当な扱いに対し戦ったことが私の誇りですし、その後の自信にもなりました。

健康や病気にはさまざまな性差があります。2002年にはInstitute of Medicine(米国医学研究所)(注:現在は、National Academy of Medicine(全米医学アカデミー))が性差医学

研究を網羅的に集めた報告書「Exploring the Biological Contributions to Human Health ; Does Sex Matter?」を翻訳しました。社会文化的な性と生物学的な性の両者が健康には深く関わっているのです、この分野ももっと発展することを願っています。

また、女性のがんは男性よりも若年から始まり、非正規雇用が多い、収入も少ない、妊孕性にも関わるなど女性特有な問題があります。2008年から Cancer Ribbons という NPO で「がんと働く」プロジェクトを続けています。

少子高齢化が叫ばれ、2020年には少子化社会対策大綱、第5次男女共同参画基本計画が出されました。様々な法律や制度、社会保障を大きく見直す時期が来ています。

人生の残りの時間は、次世代のために使いたいと思っています。小さな力でもまともな力になります。そして、女性の力はそもそも小さくないのです。自分の力を信じて最大限活用すること、仲間をつくること、ある意味楽観的に、ある意味他力本願的に、前を向いて進むことが大事だと思います。一緒に進んでまいりましょう。